

そのサロンを見つけたのは、深夜に何気なく開いた口コミサイトだった。

仕事で溜まった疲れが抜けず、肩も腰も重くて、おまけに下腹部の奥がじんわり疼いて、どうにも眠りが浅い日が続いていた。

そんな時に目に入ったのが、「リエル」という完全予約制のおまんこ用のサロンだった。

白を基調にした清潔な店内写真。柔らかい照明。アロマと音楽に包まれた個室。

口コミには「体の芯までほぐれた」「今まで受けたどの施術とも違った」「終わった後、しばらく立てないくらい力が抜けた」といった感想が並んでいた。詳しい施術内容は曖昧にぼかされていたけれど、どの口コミも高評価だった。

気になって、何度もページを開いた。予約フォームまで進んでは閉じて、また数日後に開いて、口コミを読み返して。けれど、予約枠はいつ見てもほとんど埋まっていて、次に空いているのは二週間後の夕方だけだった。私は迷った末に、その枠を押さえた。

予約した当日。サロンの中は写真で見た通り白と淡いベージュで統一されていた。低く落とされた照明、ほのかに甘いアロマの香り。静かな音楽が流れていて、外の音はほとんど聞こえない。

「どうも、いらっしゃいませ」

受付をしてくれたのは、若い男性だった。二十代前半くらいだろうか。最初に目に入ったのは、柔らかく染められた明るいブラウンの髪だった。少し長めの前髪がラフに流されていて、どこか抜け感がある。

顔立ちは整っているけれど、冷たい印象はない。目元は大きすぎず細すぎず、笑うと少しだけ目尻が下がって、人懐っこそうに見えた。

すらりと背が高く、肩の力が抜けた立ち姿。清潔感はあるのに、真面目すぎない。丁寧そうなのに、どこか距離が近い。

「三時からご予約されてた、お客さまですよね？」

「は、はい」

「久世って言います。本日担当なんで、よろしくっす」

「……え、男性の方が担当なんですか？」

「あー、本来の担当が急に休みになっちゃいまして」

久世さんはさらっと言いながら、手元のタブレットをスクロールした。焦る様子も恐縮する様子もなく、ごく当たり前のことを話すような口ぶりだった。

「変更ご希望なら全然できますけど、次の空きまでお時間いただきます」

二週間前によく予約を取ったのに、ここで変更をお願いしたら、次は未定。けれど、目の前にいるのは男性だ。いくら清潔感があって、サロン側の人だと分かっているけど、男性なのは悩ましい。

「とりあえず、ちょっとだけ試してみませんか。合

わなかったらすぐ終わりにするんで」

久世さんはタブレットから視線を上げて、軽い笑顔に向けた。丁寧というより、慣れた感じのする笑い方だった。

「途中で嫌になっても料金はいただかないんで。まあ、損はないかと」

「……本当に、途中でやめてもいいんですか」

「もちろん。こっちから無理強いは、しないですよ」

最後だけ、少し柔らかくなった声だった。

「……あの、じゃあ少しだけ……」

「ありがとうございます。じゃあ、説明しますね」

久世さんはタブレットの画面を軽く指で滑らせながら、今日受けるコースの説明を始めた。

画面には、聞き慣れない専門用語と簡単な図が並んでいる。専用機器で敏感な神経に段階的な刺激を

与え、こわばった部分をゆるめながら、体の巡りと深い脱力を引き出していく——そんな内容らしい。

「今日のメインは、うち限定のケアですね。専用の吸う機械と振動する機械を使って、かなり集中的にアプローチしていくタイプです」

「……はい」

分かっていたはずなのに、改めて説明されると、胸の奥がぎゅっと縮んだ。

柔らかくぼかされていた口コミの言葉が、急に現実のものとして輪郭を持ち始める。自分がこれからなにをされるのか、頭の中で具体的になってしまって、思わず視線を落とした。

「部位としては、クリトリス周辺を中心に見ていきます。そこをゆっくり刺激して、骨盤まわりの緊張を抜いて、自律神経も整えていく感じですね。120分コースなんで、最初は軽め、そこから様子見ながら少しずつ強くしていきます」

久世さんはさらっと言った。

恥ずかしくなるような単語も、ただの施術名みたいに口にするから、こっちだけが過剰に意識しているみたいで余計に落ち着かない。

「人気ありますよ、このコース。終わった後、立てないくらい力抜ける方も多いです」

口コミにあった「体の芯からほぐれる感じ」という言葉が、また頭をよぎった。

「内容はこれで合ってますね？ 今日はこのコースで進めます」

「……はい」

私が小さく答えると、久世さんは個室へと案内した。

案内された個室は、白と淡いベージュで統一された清潔な部屋だった。中央には白いシーツの掛かった施術台があり、横にはタオルや消毒液を並べたワ